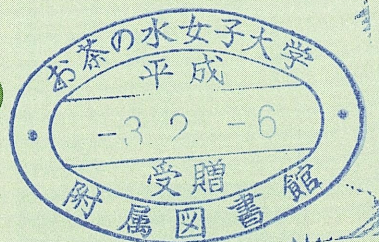


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1991 3



第90巻 第3号 日本幼稚園協会

保育者と母親へのメッセージ

かえるの学校

高橋系吾・著



★内容の一部★

その一言

育児ないないづくし
子どもないないづくし
当世若者ないないづくし
父親ないないづくし
母親ないないづくし
叱り方・ほめ方

よい子を育てる子育て五則
子どもをダメにする育児
よい子の育て方
園長の願い……等109項目



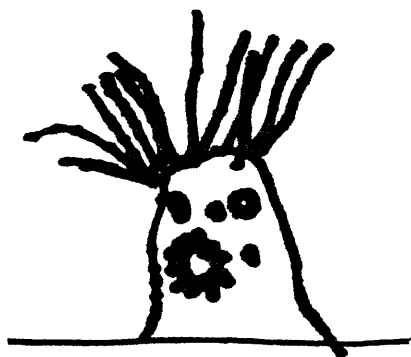
- 本書は著者が50年の教育生活の中で折々に感じたことをまとめた短文集です。
- 保育への想いが短い文章で表現されていて、著者の子どもを愛する心が強く伝わってきます。
- 子どもの歌には「雀の学校」があり「めだかの学校」もありますが、「かえるの学校」というタイトルがないので、子ども一人一人の遊びを尊重したい意味を含めて、この書名がつけられました。ちょうどかえるたちの歌声のように子どもたちがカーバいに遊んでいる姿を集めたものです。
- これは幼稚園の玄関に掲示されたり、掛図状に書かれたりして、心あるご父母の方々、学生の皆さんに読まれ、好評を得たものばかりです。
- 本書には各頁にたじまじろう先生の楽しい子どもの遊びのイラストが入っています。

B6判・144頁・定価1,000円(消費税込み)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼 児 の 教 育



第90卷 第3号

幼 児 の 教 育 目 次

— 第九十卷 第三号 —

© 1991
日本幼稚園協会

〈巻頭言〉 教育の問題を考える……………牛島 義友……………(4)

韓国幼児教育学会における講演 (二)

幼児保護と教育の政策……………津守 真……………(7)

思い出の中の保育(2)……………守永 英子……………(14)

特集〈風〉

こわーい風の話……………塚本 治弘……………(18)

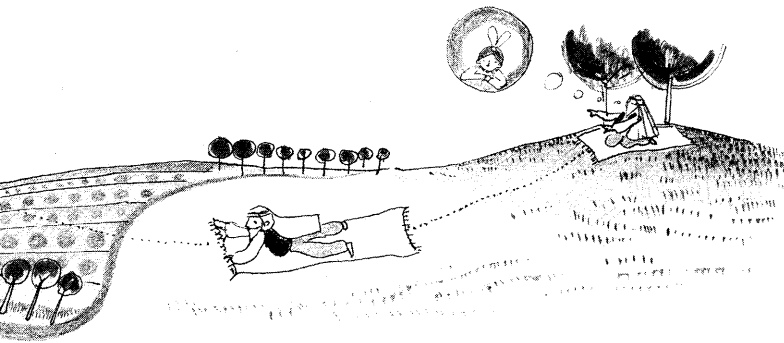
季節の風……………柴田 文子……………(22)

音楽の風……………山内えりか……………(26)

風に乗った五月とメイ……………皆川美恵子……………(29)

風を踊る方法……………多田 慶子……………(32)

風を知る ヽヨットにのって……………谷 直樹……………(36)



北の国で風になる……………上原那奈世……………(39)

保育者養成の今日的課題(2) 少子化傾向を中心として

チーム観察法の開発……………前田あけみ……………(43)

保育にあたっていること……………岩上 節子……………(51)

園庭より(10) ハンカチ……………松井 とし……………(54)

ある日の育児日記から(3)……………佐藤 和代……………(56)

ヨーロッパ絵画にみる幼児発見の系譜とその背景(4)……………藤田 博子……………(57)

表紙版画・樫村 文夫

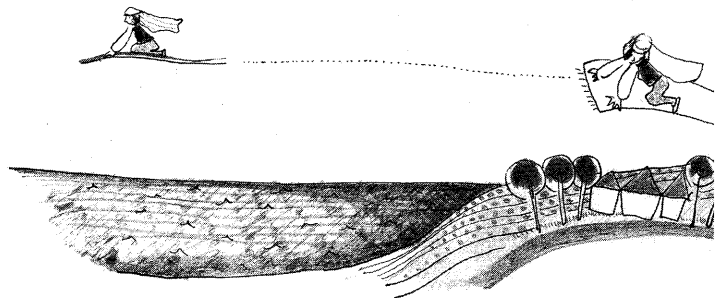
扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／豊田 一秀・吉岡 晶子

編集部・大沢 啓子



教育の問題を考える

牛島 義友

最近『エンド・オブ・アメリカ』という書が出版されたが、著者のステイブン・シュロスタインは、アメリカ人でアメリカの大学で歴史と哲学を学び東京大学の日本歴史の修士号を獲得、又コロンビア大学のビジネススクールで学び、現在、経営コンサルタント会社を経営している異色の日本通であり、表題のように一九九〇年代は、すでにアメリカ経済の没落とそれに代わる日本、韓国、台湾、シンガポールなどに世界経済の主軸が移動し、それに対する対策を論じているが、アメリカの退行には製造業敗北があるが、その基には人の問題があるとして家庭や教育のあり方について強い反省を説いている。たとえばアメリカの離婚率は一千人に五・二人であるのに対し、日本では一・三人、あるいは片親の家庭がアメリカでは二〇パーセント以上、日本では六パーセントに過ぎない。日本でも

働く女性は激増してはいるが出産休暇の保証があるが、アメリカにはない。すなわち日本やアジアでは儒教的精神が尚強い支えとなっている。また学校の進学率や識字率、学力(数学の国際比較にて日本の方がすぐれている)も日本の方が高いし、また高校生などの不良化、麻薬摂取が目に残り、それに比べ日本ではまだまだ健全であり、日本に学ぶ必要がある」とまで説いている。日本人の立場からは、我が国の教育制度は欠陥だらけであり、進学競争のために学校教育が混乱されていると見ているが、この著者の眼からは日本や韓国の方がはるかに教育的環境はよいと論じている。

たしかに日本の義務教育制度は徹底しており、どんな僻地に行っても立派な学校が造られている。都会の学校こそ生徒達があふれており行き届いた指導は出来そうにもないが、過疎地帯などに行くと、少数の生徒のためにも行き届いた教室と教員が配属されており、却ってこちらの方が子供のためによい教育がなされるのではないかと思われる位である。

ただし日本の教育行政は行き過ぎており、教科書の問題、あるいは生徒指導、服装に至るまで統制が行き過ぎている。日本の問題はむしろ個性の尊重、いかにしたら自主的な創造的な態度が育成されるかの点にかかっている。幼児教育を見ても私立幼稚園協会は一時活発な自主的活動を行っていたが、最近はおっぱら補助金獲得に力を入れ、またひとたび補助金を受けると文部省の行政指導が強化されてくる。今日の私立中、高では補助金で学校経営は完全にコントロールされてしまい、父兄の負担をふやそうとすると、補助金は減らされ、段々画一化されて来、建学の精神や独自の校風はなくなっている。

有名校になると生徒は集まってくるが、そのためには上級学校への進学率が高いとか、大学に附属しているなどが必要となり、真の自由な真剣の教育をするだけでは経営が成り立たない。児童の福祉関係でも似た所があり、障害者の施設福祉と家庭福祉では比較にならない差が出来てしまった。ただ老人福祉に関しては多様性が強く、億単位の入所金の豪華な老人ホームもあるが、また軽費老人ホーム、無料の施設もある。自分の老後の問題として自主的に選択する事が出来る。子供だとして彼自身は生産力はないが、親がついている訳であるから、親の能力と熱意によって区別された待遇が与えられてもよい訳である。画一化のみが公正であると考えるのは民主的な態度ではなく、国家統制が強化されるだけであらう。今日日本での教育問題といえばそれぞれが愛情に満ちた健全な家庭があり、個性が尊重される教育環境がつくられ、このため親たちも自己の責任で幼稚園や学校を選択する事であらう。

(元お茶の水女子大学教授)

韓国幼児教育学会における講演 (二)

—— 幼児保護と教育の政策 ——

津 守 真

前号のような社会変化をふまえて、文部省は幼稚園教育要領の再度の改定を行うにあたり、『幼稚園教育の在り方』について幼稚園教育要領調査研究委員会に諮問し、一九八五年にその答申がなされました。そこではこれまで幼稚園教育についての共通理解がえられていなかったことを指摘して、一九六四年の幼稚園教育要領を次の視点から改善することの必要が述べられています。

(1) 幼稚園教育は幼児の主體的な生活を中心に展開されるものであること

すなわち幼稚園の主人公はプログラムでもなく教師でもなく幼児自身であることです。

(2) 幼稚園教育は環境による教育であること

とくにここで、教師の果たすべき役割の基本は、幼児と生活をともにし、幼児との信頼関係を十分に築いて幼児の心に触れ、その発達や興味・関心の芽生えを発見し、それを育てることだと述べています。

(3) 幼稚園教育は幼児一人一人の発達の特性および個人差に応じるものであること

同年齢でも生まれ月による差異には大きなものがあります。

(4) 幼稚園教育は遊びを通しての総合的な指導によっておこなわれるものであること

ここでは幼児の生活が遊びであることが強調されています。

また、教育内容を考えるに当たっては、幼児や幼児を取り巻く環境等の変化および今後の社会変化に対応する観点から、次のことが指摘されています。

(1) 人とのかわりをもつ力の育成

ここでは自己の存在感と、他者とのコミュニケーションが強調されています。

私の考えですが、これまでは社会性すらも個人の能力としてみるが多かったと思いますが、これからは、異質な他者と交わって共同の生活を作る体験をすることが幼児期から必要と思います。幼児は異文化の人とも障害をもつ人とも、直ぐに一緒に遊びます。このことは皆様が良く知っておられるように、日本の社

会にとっても最も困難なことです。これからの幼児教育の最大の課題のひとつだと私は思います。

(2) 自然との触れ合いや身近な環境とのかかわり合い

ここでは、幼児期の認識や思考は、日常の生活体験の中で、親しみ深い具体的なことや物を手がかりとして行われることが述べられています。

また、文字、数量にかかわる経験については幼児の生活や遊びを豊かに展開することにより、生活体験として自然な形でそれらへの興味・関心が培われるようにすべきことが強調されています。

(3) 基本的生活習慣・態度の形成

毎日を気持ち良く過ごすことは、幼児の生活を形成する上で欠くことができません。基本的生活習慣・態度の形成は生活を健康で豊かなものにするのに重要です。

この『幼稚園教育の在り方』に基づいて、一九九〇年に幼稚園教育要領の三度目の改定がなされました。今回

は五領域に分け、内容は前回に比べてずっと大まかなものになっています。領域は具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることがとくに記されています。

保育所保育指針もまた一九九〇年に改正されました。

前回同様、養護と教育が一体となつてということが強調されています。また、社会変化による要請に対応して、

○歳児の乳児保育が付け加えられました。また、家庭や地域社会の変化に伴つて生じる多様な保育需要に対しては、保育所は柔軟に対応すべきことが強調されています。

一九八〇年頃からの社会変化は世界的な規模で起こつたといつてよいと思います。ことに婦人の就労、両親の共働き家庭の増加により、早い時期から長時間家庭を離れ、保育施設で生活する子どもたちがいちじるしく増加し、その傾向はなお進行しつづにあります。幼稚園や保育施設が、狭い意味の教育だけを考へていたのでは、幼児に必要な生活を備へることができなくなつてきました。このような背景のもとに一九八一年に、ユネスコは

“Early Childhood Care and Education” (ecce) の概念を採択しました。E C および O M E P (World Organization for Early Childhood Education) も

この概念をとりいれています。

幼稚園や保育所が、家庭の保育機能をもたう必要を生じた現実はあるにしても、家庭の代わりと考へてよいとは言えません。ユネスコの報告書では、幼児教育を学校という狭い壁から解放して、家庭とコミュニティにひろげることが急務であることを強調しています。幼児教育は、狭義の学習教育に閉じこもるのではなく、広い意味での人間教育になうものであることの認識を新たにせねばなりません。幼児保育施設が、家庭と協力して人間を育てることに力を注ぐことは、技術の進歩にのみ人の目が向けられがちな現代の我々の社会の急務です。

現代の幼児教育が社会の要求する人間を作るのではなく、社会の変化によつて最も圧迫されやすい幼い者が生きやすくなるように、我々の社会や家庭が子どもたちから奪つたものを取り戻してあげることこそがその使命で

あると思います。

*

就学前教育の変わりつつある概念

研究成果や国の社会政策の両面に反映されているように、就学前教育の概念は急速に変化してきています。最近まで、それは主に公的小学校教育が下方に延長したものととして見られていました。しかし、この就学前教育の見解はあまりにも狭く、不十分であるという認識が増大してきました。就学前教育の基本原理は、過去には発達心理学に由来しています。現在その強調点は、家族や社会における子どもを含む広範囲の社会的研究にどんどん移ってきています。重要なことは、社会構造の中での適応性であり、地域生活への参加であり、そして何にも増して、とくに母親の役割の重要性にあります。というのは、この年代の子どもの環境で唯一の重要な調停者であるからです。四歳～六歳（または他の近い年齢）に對する学校教育のような就学前教育はもう見られなくなりました。そして就学前教育は、妊娠時から正規の学校教育の開始までにいる子どもの総合的発達に貢献する諸活動全体とし

て再定義されています。そのような諸活動をより適切な用語で表すとしたら、「妊娠時から幼児期の養護および教育 (care and education)」となるでしょう。

（就学前教育に関するユネスコ国際会議最終報告書より抜粋、パリ、一九八一年十一月二十三～二十七日）

*

3 幼児保護と教育の政策

家庭や地域社会の変化にしたがって生じる保護と教育に対する多様な要望に、幼稚園や保育所が対応してゆく必要は世界中に生じています。

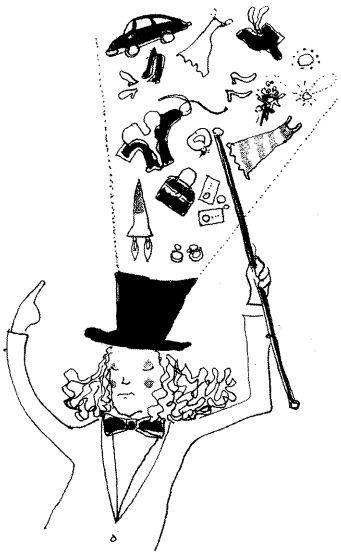
例えば、イギリスでは、幼児教育は従来 department of education と、department of social service と、行政が二つの部局に分かれていましたが、近年は多くの自治体で、この両者を department of education に統合する傾向にあります。そして、統合されたナースリー・センターが増加しています。地域を考慮した革新的なプログラムがなされているのはこれらのセンターです。

それは朝七時半から夕方六時まで開かれていて年間二週間の休みしかありません。しかし、そこにくる子どもたちは、それぞれの必要に応じて時間帯や通園日を選びます。毎日、全時間通ってくる子どもはほとんどありません。幼児をもつ母親は、働いている場合も、パートタイムが多く、父親も育児を助けるので、要求が多様だからです。また、働いていない母親は、子どもづれで何時でも遊びに来て他の親たちとおしゃべりをしてゆきます。

玩具や本も利用できます。親たちや地域に対して開かれていることがその特徴といえます。いま英国には一〇〇以上、このようなセンターがあります。英国には、このほかに従来の幼稚園、保育所、またプレーグループがありますから幼児保育施設は多様です。これは英国ばかりでなく、世界的な趨勢です。

ソ連でも一九七一年に福祉省の保育所と教育省の幼稚園が教育省に一元化されました。また、ドイツでは、州によって幼稚園法、児童福祉法によって幼稚園が運営されていますが、どちらの場合も、保護と教育は分離せず

に考える伝統をもっています。私の知っているところでも、ドイツから日本にきて長年日本の幼児教育に貢献されたキュックリッヒ先生は、日本の幼児教育の制度が二つに分かれていることについて非常に残念がられています。これが一つになれば日本の幼児教育は決してよくならないと情熱をもって語られていました。



日本の厚生省も、最近、このように地域に開かれたセンター制を奨励しています。地域によっては、三〜五歳の幼稚園と、〇〜三歳の保育所とを同じ建物の中に設置して、親の多様な要望にこたえようとしている試みもあります。幼稚園の子どもも、母親が働いている場合には、夕方まで保育します。その子どもたちは保育所と同様に措置されます。

社会変化の中で、子どもたちはそれぞれ違った状況や環境におかれても、それぞれの子どもが自分自身を形成し、最善に成長するように、保育の場の多様性が求められています。

障害をもつ幼児についても、一言ふれておかねばなりません。一九七〇年頃より、幼稚園、保育所で障害児を受け入れることが望ましいとかがえられるようになりました。自治体によって異なりますが、障害児を二〜三名受け入れると、財政あるいは人員の点で補助がなされるのが普通です。この場合も障害の度合などによって、保育の場の多様性が求められます。私の学校の場合に

は、三歳から十二歳の子どもが学校の対象です。それに加えて、〇〜三歳の幼児とその親たちとための週二日の保育グループが付設されており、これは区の福祉部の管轄です。障害児の場合には、障害と判明したときから親と一緒に保育することが必要です。また、障害幼児の保育でも遊びが主となることはいうまでもありません。

子どもの必要に答えることと、親の地域の必要に答えることが、保育施設に対して要求されます。子どもの必要は、それぞれの子どもが十分に遊べることです。親と地域の要求は、社会変化の時代に、親の生活の変化に合わせて、長時間保育と低年齢乳幼児の保育です。また、緊急一時などの要求に答える柔軟性です。

前にお話した行政管理庁の調査によって判明したことは、地域によって保育所あるいは幼稚園が偏在していることです。そこでは、そのいずれかが両方の要求を満たしてきたといえます。本来、careとeducationとは切り離せないものですから、これは当然です。

そこでこの二つの制度が、それぞれに十全の機能を果

たそうとするほど、同じことを二つの制度ですることになります。これがまさに日本の各地で起こったことでした。幼稚園と保育所が隣合わせに作られたり、私立の隣に公立がつくられたりしました。ひとつの制度だったから、こんな無駄は起こらなかったでしょう。

もしも地域として保育所の機能が欠如しているならば、既存の幼稚園がその機能をもつように、それに必要な助成をするよう、行政的措置がとられればいいのではないでしょうか。長い目で見るならば、その方が生産的であると思います。

最後に、大人と子どもとの間の実際保育の質の向上の重要性について述べねばなりません。どんなに制度が整備されても、保育の質が良くなかったら、子どもは幸せにならないでしょう。それにはどうしたらよいのでしょうか。私は、大人が子どもの側に立ってその願望や悩みを見る目をつくるのが根本だと思っています。それはだれにでもできることであり、同時に、高度に専門的な人間

科学の問題を含んでいます。

低所得層の保育に欠ける子どもは、情緒面で問題をもっていることが多いので、保護だけでなく、いっそう高度な専門的教育を受けた保育者を必要としています。

この現代に子どもが生きやすくなるように、子どもの側に立って日々仕事をする者には、国境はありません。子どものために戦っているひとびとは世界中にいることを忘れてはならないと思います。

(愛育養護学校)

思い出の中の保育 (2)

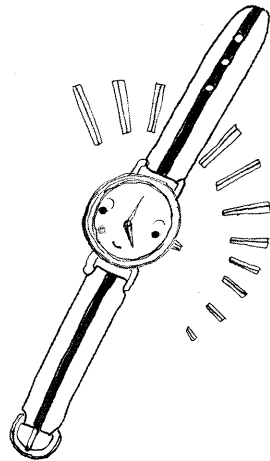
守 永 英 子

三十年あまりの保育者生活に、終止符を打った。思い返すと、いろいろな思い出が、ぎゅしりと詰まっている。うれしかったこと、驚いたこと、困ったこと、楽しかったこと、など、さまざまで、それぞれの思い出にかかわる子どもたちの顔が、まざまざと浮かんでくる。

“苦い思い出”というのもある。恐らくは、その状況にうまく対応できず、自分の中

で未解決のまま、通り過ぎて来てしまったからであろう。

運動会にかかわる、いくつかの苦い思い出がある。運動会の様子は、園によってさまざまであろうけれど、私が勤めていた附属幼稚園だけみても、昭和三十年代頃と現在とは、いささか趣が異なる。現在は、あまり長く練習期間をとらないし、全員が揃って一緒に練習することも少ない。多くは、自由な遊



びの中の一つの活動として、子どもたちの自発的な参加によって、運動会当日へと次第に盛り上げていく。以前は、小学校と一緒に運動会を行っていたという事情もあって、ゆーぎも、三歳児から五歳児まで同じものを一緒に踊っていたし、練習にも、十分に時間をかけ、出来栄えも、なかなかのものだったと思う。

私の苦い思い出は、三歳児のクラスの担任のときであった。その年のゆうぎは「花笠おどり」であつたろうか。先生たちの手作りの花笠をかぶって、全園児が園庭で練習していた。三歳児のクラスも園庭の片隅で、小さな円になって参加した。その練習の途中で、Y夫が、かぶっていた花笠を、突然投げ捨てたのである。

Y夫にとっては、「突然」ではなく、それなりの心の流れがあつてのことに違いない

が、私にとっては、突然であつた。それだけ、Y夫の心の動きが見えていなかったと言える。運動会に向けて、先輩の保育者のクラスにあまり後れをとらないように、仕上げなければならぬということに、気をとられていた。Y夫に対して、どのように対応したかはっきり記憶していないのは、恐らく保育者の立場に立った、ありきたりの言いきかせだったからだと思う。“あのときは困った”という記憶でしかないのは、保育者として、恥ずかしく、苦い思い出である。

昭和四十年代の初め頃、運動会が、秋だけでなく春も行われたことがあった。年によっては、母親離れの出来ない子どもが何人かいても、不思議ではない時期である。やっと母親から離れ、保育者のそばにすることで安定を保っていた三歳児のK夫は、運動会の進行のために役割をしょって動きまわる保育者の

あを追い、泣きながら、しっかりとスカートをつかんでいた。大多数の子どもにとっては可能であっても、生まれの遅い、一人っ子のK夫にとっては、不安を募らせる出来ごとだったのであろう。そのとき、無理に席に着かせることをせずに、K夫と一緒に動いたことが、苦い思い出の中の、せめてもの救いである。ありがたいことに春の運動会は、あまり長く続かず、何回かで、取り止めとなった。

R夫は、運動会に、どのようなイメージを抱いていたのだろうか。そろそろ運動会へ向けての活動を、保育の中に織り込もうかと思う頃、R夫は言った。「ぼく運動会しないよ」「そう、どうして?」と言っても、三歳児のことであるから、詳しい説明は返ってこない。事情がよく飲み込めないままに、自由遊びの中に、レコードの曲を流してみる。数

人の子どもが、興味をもって、曲に合わせて一緒に踊り出し、他の子どもたちは、自分の遊びを、そのまま続けたり、踊っている子どもを眺めたりしている。R夫は、「運動会しないよ」と泣き叫び、踊る手を押さえて、止めさせようとする。「運動会じゃなくて、踊っているだけなのよ」と言っても、聞き入れず、玄関にいすを持って行き、そこに腰かけて、大声で泣いた。更に困ったことには、年長組の子どもたちが、庭で踊っているときも、「レコード止めてきて!」と、泣くのである。なだめ、なだめ、やっと無事に運動会を済ませたとき、R夫は言った。「これが、運動会だったのか」R夫は、一体、何を恐れていたのだろうか。

運動会のときは、保育者は大変忙しい。自分のクラスの子どもの世話のほか、いろいろな役割を背負う。T夫が三歳児クラスるとき

は、かけっこのスタートの合図が、私の役目

であった。出発点から、一番遠くにいる自分のクラスの子どもたちを並べ、やっと出発点近くまで連れてきて、準備完了と思ったとき、手伝ってくれていた、実習生が、「T夫くんが、来ないんです」と言う。母親のところへ行ってしまったようである。T夫は、入

園当初は、お誕生会のときも席に着かないなど、少し難しいところのある子どもである。

今、呼びに行っても、恐らく来ないと思われる。準備ができて、待っている子どもたちをこれ以上待たせることはできない。止むを得ず、T夫をそのままにして、プログラムを進めた。あとで母親に聞くところによると、「新しい靴をはかせたので、それを気にして」ということのようにだったが、本当に、それだけの理由だったのであろうか。疑問であ

る。

S夫が見ている途中で、きげんを悪くして、保育室に戻ってしまい、かかわった実習生を困らせたのは、運動会の子行の日のことだったろうか。私は、運動会での役割を果たすために、S夫に対して、しっかりと対応することが、できなかった。

運動会は、“運動会を恙なく行うこと”が、一番先に立つ。確かに、大多数の子どもは、何の問題もなく通る道であるが、中には、抵抗を示す子どももないわけではない。この子どもたちにとって、運動会とは、何だったのだろうか、と思う。幼稚園の生活の中で、当然のことと思われることの中にも、疑問は多いものである。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)

こわーい風の話

塚本 治弘

◇風って何だろう？

「たれが風を見たでしょう？ ぼくもあなたも見やしない。けれど木の葉をふるわせて、風は通りぬけていく。」（作詞／西条八十）おなじみの歌です。私たちは風そのものを見ることはできません。風があるためにおこる現象をとおして、そこに風があるんだな、と知るので。風っていったい何なのでしょうか。

惑星「地球」の表面は大気の層におおわれています。



す。その大気の層の空気は太陽からたらされる熱の影響によって、上昇したり下降したりしています。

空気が上昇している地域の地表では、頭上の空気がどんどん上空にのぼっていつてしまうため、まわりの地域よりも空気がうすくなってしまう。

空気が下降している地域では、上空から空気がつぎつぎにおりてくるため、まわりの地域よりも空気がこくなるのです。

は、上空で濃縮され、まとまっておりてきた汚染空気が吹き出してくるのです。こんなときの池や林からの一見爽やかな風は、実は濃縮汚染の「こわい風」なのです。

◇断ち切ろう汚染と風のいたちごっこ

人口が集中して、都市が発達すると、どこでも問題になるのが、環境の変化です。

住宅やビルを作るために、土地が整備され、まず雑木林が姿を消します。次には雨が降るとぬかるむ道がきらわれ、舗装が進みます。屋根や道路に降った雨は、ほとんど地面にしみこむことなく下水道へ流されます。

環境の変化は、まず気温に現れてきます。太陽光で暖められたビルのコンクリートや金属の壁面は、パネルヒーターの役目をします。舗装道路の熱はフロアヒーターの役目です。

大きな木を切るなど、植物を少なくするので、葉

から付近の空気への水分の供給が少なくなり、木々がはたしていた気温の上昇防止作用や日陰を作る役目も失われてしまいます。

当然、都市部では気温がまわりよりも高くなるわけです。この現象を気象の用語で「ヒートアイランド現象（熱の島）」とよんでいます。

ヒートアイランド現象のおこっている場所では、空気が盛んに上昇しています。おだやかに晴れた日には、汚染物質はこの上昇気流に乗って、五百メートルから千メートルあたりの高さまでのぼって漂っているのです。

この汚染物質をしんにして、かわいらしい「わたくも（積雲）」が次々に発生するのを、しばしば観測することができます。気温の低い朝などには、都市特有の霧が発生しやすく、汚染物質から発生した低い「わたくも」からは強い酸性の霧雨が降りやすいのです。

都市開発↓汚染源の増加↓上昇気流の発生↓まわ

を失い、ただかすかに赤く空にかかっているだけになつてしまいます。人間たちはただ窓という窓、扉という扉を閉めきり、ひたすら耐えるのみとなります。サウナ風呂の中で我慢くらべをしているような感じでした。四年近くおりましたが、アルジェでは風といえばシロッコ、それ以外の思い出がありません。気候の変化が比較的大まかな風土では、季節の風に微妙な変化をよみとる必要性もなく、従つて風にいろいろな呼び名をつけるようなこともなかったようでした。滞在中、一般的にいう「風」と「シロッコ」という言葉以外に、風を表す言葉を聞きませんでした。もっともあまり上手でないフランス語と、挨拶程度のアラビア語しか通信手段をもっていない私でしたから、確かなことは申せないのです。

パリや、地上最後の樂園などと言はれるマダガスカル島にも、しばらく暮らしていましたが、ともかく「更衣^{ころもがえ}」などという行事が今でもしつかり日

常生活に根づいている、四季をはっきりもつ日本のような国の方が、珍しいのではないだろうか。

風は人の心に様々な思いをひきおこします。さわやかな風に口笛でも吹きたくなるような楽しさを感じたり、秋の風にふともの寂しさを覚えたり……。昔から詩人たちは風に魂を揺り動かされ、たくさんの美しい歌を生んできました。現代短歌から、私の好きでたまらない歌を二首、ご紹介したいと思ひます。

子を産みて瘦せし野良猫白南風の
くさむらに來てしづかにすわる
石川不二子

梅雨明けの明るい日、温かな南風が吹いています。子を産んだ母猫がやってきて、静かに草むらに座りました。やせて産後のやつれはみられるものの、その様子には、なんとなく満ちたものを感じ

山内えりか

風が生き物の身体の中を通るとその生き物は息をし始め、生命が動き出します。また、風がもう通るのをやめると、その生き物は息をしなくなり、生命は終わるのです。（そういうふうになっていました。）

— 26 —

風はそれを送り届け、子供は安心して過ごせます。

る事も、実は風の仕事なのですね。他に、恋人達の想いも同様に風が送り届けます。ただこちらの場合、は安心する事はなかなか難しく、心が波立ってしまふ事が多いためですが、そこまでは風も責任を負いかねるのでしょう。

と、まあこんなふうに、昔は風の仕事は今よりもっと大切とされていました。今では、特に音楽の風の方は様々な機械や技術にとつてかわられて、仕事が無くなつて来ています。音楽を運ぶのは機械（や電気）の仕事、そして作るのは作曲家の仕事、という事になって来てしまいました。でも、あまり人間達が気づかない所で、風は今でも仕事をしています。わずかな心の動きにさえも風が働きかけて音楽が生まれる、というのは今でも大いに有り得る事なのです。

分かるはず。その風に声が乗ると、これもまた気持ちの良いものです。

そして私は、と言うと、作曲をする時、もう少し風が助けてくれないかなと、いつも思います。心が静かに澄んで来れば、少しは助けてもらえるかも知れません。……。

風に乗った五月とメイさつき

皆川 美恵子



考古学者の父をもつ幼い少女は、新しい地に引越しをした次の日、穴の中に眠る大地の精霊を発見してしまった。その少女の名はメイといい、発見された精霊をトトロという。もっともトトロとはメイの命名によるもので、彼女は多分、絵本で見知っていた北欧の神話や童話に登場する大地の精霊（デーモン）トロールを、それらしく言葉に発した時、トトロと呼んだらしい。余談だが、このメイは、トゥモロコシをトゥモコロシとも呼び慣らわしている。

宮崎駿氏のアニメーション『となりのトトロ』（一九八八）は、作者が永年住み慣れている狭山丘陵を舞台として描いている。時代背景は、一九五〇年代頃であり、母親は結核のため、東京郊外の空気の澄んだ病院で療養生活にしている。残された家族は頻繁にお見舞に出かけられるようにと、同じく近くの郊外に転居した。病院はアニメーションでは七国山病院となっているが、狭山丘陵の東端に位置する、関八州を見渡せるところから名付けられた標

日本列島で最も威風堂々と巨樹となりうる樹種は楠なのである。そして狭山丘陵は、植生分布では東日本にかけてのブナ林帯に属するのではなく、西日本の照葉樹林帯に属するという。現在の所沢周辺には樺の大木がそびえ、クヌギやコナラなど二次林としての落葉広葉樹が武蔵野の面影をとどめながら残っている。しかしかつては、楠、シラカシ、シイといった樹木が繁っていた。田畑に開墾された時に、それらが伐採され、その後、今見る樹木が植えられたのである。

アニメーション『となりのトトロ』には、所沢の

☆

能な選ばれた子どもであることが示されている。

姉がトロトロの腹の上に降り立つ。まるでキングコ

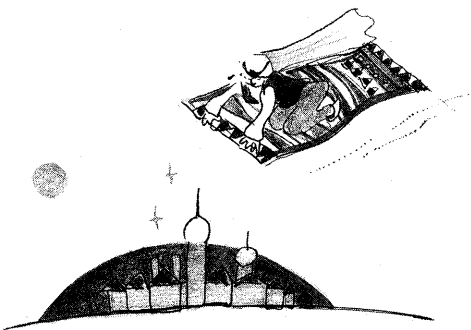
四人は無風の町に吹く一陣の風の如き存在で、町に微妙な変化をもたらす。四人を無視し排除しようとしていた人々の心にさえ、認識できない変化が生まれている。そんな存在を描きたかった。

乳母車からすべり落ちて登場する少女は、卵からかえるように丸く縮めた背中から手足を少しずつ伸ばしていく動きにして“生まれる初々しさ”をだそうとした。手かせをされたまま激しく踊る犯罪者に嵐のような“秩序のない強さ”をたくした。地面をほうようにしていた女こじきの、ふいに幻の子を抱きあげて伸びあがる“やわらかな”動きにも、犯罪者の誘いにふらりと去っていく男の芸人の“気まぐれさ”にも、絶えず風を感じらる作品にしたかった。「順風」ではない風をやりたくて創った作品だった。

さて、この文を書くうちに気づいたのだが、「風」を表現するのに、舞台、そして舞踊は全く適当なジャンルかもしれない。流れ去りとどめること

のできない風は、全く同じものをくりかえすことのできない、一回性の舞台でこそ生きるといえないだろうか。私はまた舞台から風が流れ出るような作品をめざしていきたい。

(舞踊家)



当時、湖上には風速一〇メートル近い風が吹いていた。湖面は白波が立っており、小型ヨット（ディングー）がぎりぎり帆走可能な状況であった。ツバメ号には最近のディングーには滅多に見られなくなった縮帆機能がついていた。が、艇長のジョンは、スピードが落ちるのを嫌って縮帆せずに出航してしまった。

ヤマネコ島から馬蹄湾へは方位南西の方向だから、北東の追い風なら一直線だ。フルセル（総帆展開）で行けば、風が強くなる前に馬蹄湾に逃げ込める。そうジョン少年が判断したのも無理はない。飛ぶように快走してきたツバメ号はしかし、風軸を超えて帆桁（ブーム）を出す格好になった。セル（帆）は突然裏帆を打ち、帆桁が反対舷にうなりをあげて一気にまわってしまった。ヨット用語でいうワイルドジャイブである。

バイキング船のように帆を横に張る帆船と違って、ヨットは帆を縦に張る。そのため追い風の時に

は帆桁を左舷か右舷のどちらかの真横に一杯に出して走ることになる。最も不安定な姿勢である。

風が真後ろ（風軸という）なら問題はないが、風軸を境に帆の出し方はかえなければならぬ。右斜め後ろから風を受けるときは左舷に、左斜め後ろから風を受けるときは右舷に、という具合である。この帆桁回転の操作がジャイブである。

少々専門的になってしまいが、ジャイブが危険なのは、長い帆桁が帆柱（マスト）を中心に一八〇度回転するとき非常に大きなモーメントが起きるからだ。通常のジャイブではこのモーメントを軽減させるために、帆綱（シート）をゆっくり手繰っていき、また徐々に出していくようにする。

ツバメ号はヤマネコ島からずっと左舷に帆桁を出していた。後から考えると馬蹄湾に向かって左手にあるカマス岩をかわすには、ジャイブをする必要があったのだ。風を左側斜め後ろから受けると、左舷に出した帆の裏側に風が回り込んでワイルドジャイ

ブを起こしやすい。危険この上ない。

ただ風が強くなってきた当時の状況では、ツバメ号のような一枚帆の縦装ヨットがジャイブすること自体大変危険であった。そこでジョン艇長は、ワイルドジャイブを起こさないギリギリの線でカマス岩の右側をかわそうとしたに違いない。

この賭は結局裏目に出た。

ツバメ号はワイルドジャイブに見舞われる。帆船は左舷から右舷に乗組員の頭上を一気に回る。ジョン艇長は直前に警告の叫びをあげた。回転する帆船に当たれば、頭を割られてしまうか、艇の外にたたき出されてしまうからだ。帆船の回転によって、反時計回りの巨大なモーメントが舟を支配してしまう。コントロールを失ったツバメ号は船首を左に、カマス岩の方に振られてしまう。

岩に激突した結果、船首に開いた穴から浸水したためにツバメ号は沈んでしまった。木造のヨットなのにツバメ号が浮いていられたかった理由は、ツバ

「願つていれば叶えられる。出来るか出来ないかでなく、そのことをやりたいか、やりたくないかで決まる。」というのは私の生活信条でしたが、ラツキーにも、○免許取り立ての同志？との出逢い、○モトトレインの出現（上野、函館間のバイクとライダー専用列車）、こうなれば、残された問題は、○体力と短足に合った自動二輪を手に入れること、だけでした。

その後は八ヶ岳・裏磐梯へと長距離に挑戦して、排気ガスと信号だらけの本州の道路にうんざりし、益々北海道への思いを募らせたものでした。

一九八五年八月十七日、モトトレインのキャッチフレーズ「あした北の国で風になる」を見て寝台車に乗り込みました。第一回目のコース函館→雷電海岸→札幌は海岸線が多く、その上連日雨に祟られ、海からの風雨に横倒しにされそうな寒さに震えるつ

他は、60 km/hのまさにトコトコ走行でした。時折Vサインを出し突風のように走り抜けるヤングの軍団に、「ああもったいないーい」などとおとなしい「風」ぶりでありました。

そして五十歳の今年、願ってもないチャンスに恵まれ、相棒を誘惑し（出張旅費は山分けという条件付）二泊三日の研修会場の後にしました。三回目のコースは全行程（一週間）快晴に恵まれたこともあって、思い出す度にさわやかな風が私の心を吹きぬけます。

☆ 警笛ひとつ鳴らさず、気が付いて道路端に寄せるまで静かについて来る車、心細くなった頃交わすライダーとの笑顔のVサイン、「頑張れ！」の合図に喘ぎながらも日焼けした腕を青空に突き上げて、

拳で応えてくれる自転車族、やっと辿り着いたライダー専用の宿ではオーナーの生き方を感じさせてくれる家庭的なムード。大自然の中では人はみなやさしくなるのでしょうか。

☆ 車に跨がった後はノンストップの独りの世界、前後に一台の車もなく何処までも続く直線道路、全身に感ずる牧場の匂い、思わずアクセルが弛んでしまう壮大な景色、時折飛んでくる虫達のつぶて……。

そんな全てが、私を「風」にしてくれました。

それは、たとえどんなに東京で自由に走り回ることがあろうと、手に入れることの出来ない、北国のくれた贈り物でした。

（港区立南海幼稚園）

保育者養成の今日的課題 (2)

～ 少子化傾向を中心として～

チーム観察法の開発

前田 あけみ

保育者養成において、観察法は、多くとりいれられている。しかしながら、その具体的な展開は、様々である。その観察法をどのように活用するならば、子どもの自己形成を促し、人とかかわる力を育てる保育実践力を高めることが可能となるのであろうか。本稿では、筆者が実際試みている付属幼稚園へのチーム観察についての方法的特色と問題点を明らかにしたい。

チーム観察の概要は、午前九時から十時半まで観察(L1: 学級全体を捉える者一名、L2: 特定の遊びやコーナー、グループを捉える者三名程度、L3: 抽出現を捉える者五名程度、L教師: 教師を捉える者一名、Lフリー: 特に前もって視点を決めない者二名程度)、十一時から十五時半まで観察記録をもとに資料作り、十五時半から十八時半まで、資料をもとにしての集団討議となっている。(より具体的な手続きやカリキュラムの実際については、次号で述べる)

一、何を観察するのか。

まず、何を観察するのかと言えば、幼児の遊ぶ姿を含めた幼稚園の生活である。保育者養成における観察は、心理実験のような仮説をたて検証するための観察、つまり子どもを非日常的な場面に置くのではなく、園での子どもの生活そのものをより自然な形で観察することに意味を置く。なぜなら、保育者にとっての主要な課題は、幼児がさながらに生きて動いているところの生活にどうかかわっていくかであり、観察法も、そのさながらの生活そのもののへのアプローチとして位置づけられるべきであると考えからである。

倉橋惣三は、次のように述べている。幼稚園の真諦は、「いかなる生活形態に幼児を生活させるのが、幼稚園の真の姿、実体であろうかということではなければならぬのであります」「子どもが真に、そのさながらで、生きて動いているところの生活をそのままにしておいて、それへ幼稚園を順応させていくことは、なかなか容易ではないかもしれない。しかし、それがほんとうではありますまいか。少なくとも幼稚園の真諦は、そこをめざさなく

てはならない」(注1)そして、さながらの生活は、特に、幼児が幼児らしく遊んでいるところに、幼児の真の生活があり、幼児教育の原点はここにあるからである。

また、「幼稚園教育の在り方について」の中のⅣ改善の視点の中で、次のように述べられている。「幼児の生活の中心は遊びである。…(中略)幼稚園における指導の中心は、このような遊びにあるのであり、その中には幼児が人間として発達させていくのに必要なものが混然一体となつて含まれている。その意味で、遊びは一定の系統的観点から分析しつくせないものであり、その望ましい指導は必然的に総合かつ柔軟なものとなる」このように遊びの指導が、幼稚園教育の中心となるものであれば、養成における観察の対象も、当然幼児の遊ぶ姿を含んだ園の生活となるう。

二、どのように観察するか

日常ありのままの行動・生活を観察するには、行動をありのままに、生きた姿を、全体として(as a whole)

捉えることができる自然的観察法が適切であろう。

また、保育においては行動の生起が偶然に委ねられており、観察しようという事柄は、いつ起こるか分からない。また一度経過すれば、ふたたび繰り返して起きるという性質のものでもない。ただ一度限りの出来事である。けれども、観察者からすれば、偶発的で一過的であつても、生起している事象や行動は、歴史的因果、体系的因果、志向的因果において、必然的なものと考えられる。そうであるとすれば、自然的観察における一過性も、純粹現象を大切にする立場からは、それを見落とさないで確実に捉えていくことが必要とされていると言えるよう。

しかし一方で、この自然的観察法は、観察の意図と明確な視点がなければ、何をどのようにに観察するのか、いたずらな混乱に陥る危険性がある。明確な課題意識と観察の視点が前提にあつて、はじめて自然的観察法のもつ自然性のよさが発揮されると考えられる。これに関して筆者は、保育過程を明らかにするために、大枠の視点を

用意している。すなわち全体を見る視点(L₁)、グループや遊びのかたまりを見る視点(L₂)、個を見る視点(L₃)、教師を見る視点(L教師)、特に視点をあらかじめ決めずにその時、見たくなったものを見る視点(Lフリー)を用意し、それぞれの学生がそれぞれの視点で観察をし、その生の観察記録を資料づくりで出会わせて、保育過程が時間の経過にそつて、より全体的に立体的に明らかにされる方法を試みている。

用いている表記法は、主に行動描写であり、補助的に図や絵を使うこととしている。行動描写法は、行動のすべてをそれが行われている事態の情報とともに、生起し展開する順序に従つて系列的に、平易な自由記述によつて記録し、あとで、目的にそつて分析する方法である。この方法では、行動目録法などに比べると、行動を直接的に描写するので、大切な行動の記録(例えば、その時は無意味に思われた行動が、実は、次の行動の伏線となつてくるようなもの)を抜かす危険が少なく、また行動の流れや保育過程が把握しやすく、種々の観点からの分析

にもたえうる柔軟な資料を提供する利点をもっている。しかしながら一方で、生起する行動すべてを記録するのはかなり困難で、記録に追われると十分な観察がしにくいという問題点や、分析の基礎資料を作成するのにひどく時間がかかるという難点がある。

三、何のために観察を養成法としてとりいれるのか。

保育実践における観察の究極の目的は、保育実践力を高めることにある。K・H・リードが「先生はみんな、どのような方法で子どもを観察したらよいか」という観察者としての技能を学ぶ必要がある。その状況で起こっていることがらをできるだけ正確にかつ客観的に見て、記録しなければならない。(中略)客観的に観察し、注意深く記録し、その記録を十分に考えながら読み返すことを身につければ、先生は子どもの行動をもっとよく理解できようになる」(注2)と述べているように、観察の技能を身につけることは一つの大切な養成課題である。筆者が試みている観察は、得られた観察資料を基に一つ

の結論や法則を見出すためのものではなく、それ以前の、観察法そのものを身につけることならびに種々の分析に耐えうる柔軟な資料づくりの能力を発達させることに主たる目的がある。

同時にその過程で、学生達は、次のような保育の基本的技能を獲得すると期待される。

(1) “みる”こと自体に自らを解き放つこと

養成過程における観察は、子どもとかかわる責任や指導の責任が原則として伴わない。したがって、今起きている事象に関して、純粹に追従すればよいという利点がある。ある学生は次のように述べる。「実習の時は、次どうしようとか、子どもが自分の予想外のことを言ったり、ねらいからはずれた行動をすると、もう困ってしまつて、子どもがなかなか見えなかったんです。観察はその点、気が楽で、子どもがゆったり見れます」また、L₃でT児を観察している学生は「実習の時、Tちゃんの行動の意味がよくわからなかったのですが、観察して、ずっと追ってみるとなんだかわかる気がするんです」と

実習における子どもを見ることと観察において子どもを見ることの違いについての感想を述べている。学生は教育実習では、自分が教師としてどうこの先ふるまったらよいかという自己課題にとらわれ、まず原点としての子どもを十分に見ることが、難しい傾向が伺える。

勿論、今ここで状況を共有し、子どもとともに共感し合い、語り合い、一緒に動き、相互に応答しあう行為を通して、初めて見える子どもの世界があり、保育実践者にとって、保育の原点はあくまでも、状況内における子どもとの相互関係にある。しかしながら、状況の中にあることイコール子どもがよく見えることとは言えない。

保育者は、状況内存在としては、どうしても「I」を基点として保育状況を捉え、自己に引きつけた見方にかたよる危険を孕んでいる。むしろ自己を状況外におくことによって、かえって状況構造・かわり構造・自己構造の特性や本質が、見えてくることがある。自己が関与しない観察経験を持って保育実践へもどるならば、自己への偏りや引きつけに抵抗して、子どものあるがままの、

真にあるがままの姿を見ることができると期待されうるのである。

保育実践は、成長の過程を援助する意図を含んだ相互関係を含んでいる。この時言う「関係」というのは、人と人との単なる外面的、社会的技術的側面のみをさすのではない。固有な自分の内的世界を持つている「I」が、もう一方の内的世界をもった他の「I」と出会うということをも含んでいる。この子どもの中の内的な世界に、せまるためには、保育者は一度、自分という「I」を捨てて、子どもの「I」に視点を重ねる作業を経なければならぬ。このような「I」を捨てて、子どもの「I」に視点を重ねる作業が、純粹にみることに自己を解き放すことにおいて、一歩近づきうるのではないだろうか。

(2) 保育事象の発展過程を関係構造的に把握すること

保育事象は、次々に移り行き、全貌に掴みえない流れのようなものである。その事象の総体から、どのような側面をどのような視点で焦点を当てていくのが、重要なポイントとなる。自由遊びの場面では、遊びは多様な

様相を示す。また、友達関係やグループも多様である。

この多様なものを全ては捉えきれないと思いつつも、なるべく事実に忠実に多くの事柄を捉えたいと願う。この遊び場面を、子どもの存在する状況を一つの関係構造として捉えることが可能である。その場において、子どもや保育者は、自己や人や物とどのようにかわっているのか、その発展過程を分析する。

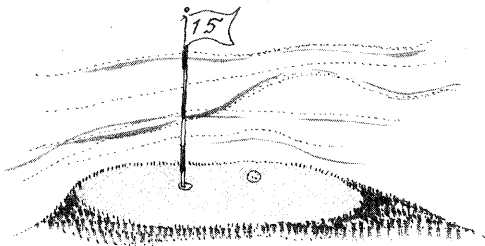
人間の行動は、非常に複雑で、刻々と変化し、しかも一過性である。こうした行動を適切に把握するには、観察をある程度組織化することが必要であると思われる。

その組織化の基盤となる理論的枠組みを、筆者は関係学の集団指導理論に求めている。この集団指導の基本は、

① 幼児の自発性を尊重し、幼児が主体的に活動を展開できるように援助すること ② 個と集団の相即的發展をめざすこと

③ 幼児期の集団活動において、人との関わりかたが特に身につくようにすることであり、その実現の方法としてチームティーチングを行う。「L₁」は、集団活動全体をとらえ、その活動の方向を明らかにしたり

(方向性機能を担う)、コーナー間の関係発展を促進する場面設定、役割付与をする(関係性機能を担う) [L₂] は、コーナー活動における、子どもたちの自発的活動を促進したり(内容性機能を担う)、子どもたち同士の関係が発展する役割付与、場面設定をする(関係性機能



を担う)「L₃」は、周辺のにいる子どもに即して動き、その子の自発的活動を促進しながら(内容性機能を担う)、他のコーナーとの関係、全体的状況との関係の発展をはかる(関係性機能を担う)このように「L₁」、「L₂」、「L₃」が三つの役割を担い合いながら、子どもたち、もの(おもちゃ)との関係が促進され集団活動が展開していく」

これは、保育実践のための理論であり、実際に子どもと接したり、子どもや保育者の行動を見るときに役立つような理論的枠組みである。付属幼稚園ではこのようなチームティーチングは行われていないが、観察で保育事象を見る視点として、有用である。観察におけるL₁は、級全体がどのようなダイナミズムの中にあるのかを、L₂は、コーナー活動やある遊びまたは、そのグループがどのように発展するのかを、L₃は、ある子どもがどのように、遊んでいるのかを追うことを視点としている。この他に筆者は、教師のふるまいを追うL教師と、特に前もって視点を定めないLフリーの視点を留意して、保育

事象を構造的に把握することを目指している。このように構造的に保育事象が捉えられることは、保育実践に直接的に役立つであろう。

(3) 対人関係的感受性を高めること

人間の行動は、外的に知覚できる行為と同一ではない。行動を本当に理解するには、その行動の意味づけが必要となってくる。単なる表面的な行動だけでなく、動機や意図、あるいは、感情と言った行動の背後にあるものの推察や解釈が必要とされる。

観察記録ならびにそれをもとにしてつくった基礎的資料に現れる保育過程は、一つの保育像である。それは複数のイメージから成り、それぞれの視点から異なる解釈の可能なモザイクであり、複数の構造からなる一つの構造、複数の解釈からなる一つの解釈として捉えられる。そして、幾つか成立する解釈の中で、ある解釈は、他の解釈より多くの人に納得されたり、ある解釈は、他の解釈より次の関係の契機となりうる。そして、そのような解釈を求めて集団討議する。そして多くの場合、多数の

人にとって「あつ、なるほど」と思える解釈は、子どもの内面のイメージや感情が見える解釈であり、と同時にその内的イメージや感情に即してかわることが、次の関係発展の契機となりうるものである。

このような解釈を見出すということは、相手の行動の意味を共感的に深く理解することでもある。それは、子どもの発達を援助するべく、状況における個人的な感知、対人関係的な感受性を高めていくことであり、それらの養成法として観察法が位置づいて来るということになるのではないだろうか。

——次号に続く——

引用文献

(注1) 倉橋惣三「幼稚園真諦」 倉橋惣三選集第一巻

P. 22、24 フレーベル館 一九六五

(注2) K・H・リード／宮本美沙子ほか訳「幼稚園——

人間関係の学習の場——」 P. 127 フレーベル館 一九

七八

(注3) 松村康平「幼児の性格形成——関係発展の保育——」 P. 118 ひかりのくに 一九七六

参考文献

(1) 続有恒ほか編「心理学研究法10 観察」 東京大学出版会 一九七四

(2) 津守真「保育の一日とその周辺」 フレーベル館 一九八九

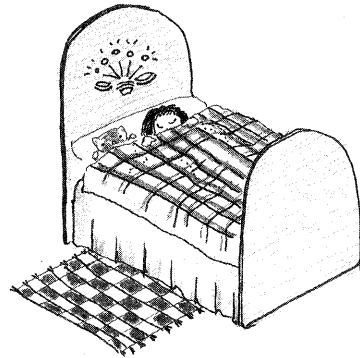
(3) ランゲフェルド／和田修二訳「教育の理論と現実」 未来社 一九七二

(4) グレーテ・A・ロイツ／野村訓子訳「心理劇 人生を舞台に モレノの継承と発展」 関係学研究所 一九八九

(富山大学教育学部講師)

保育にあたっていること

岩上 節子



幼稚園教諭になって三回目の春を、もうすぐ迎えようとしています。

春になると思い出すこと。初めての入園式。お人形を片手に、真っ赤な顔をして、ひっくり返った声で独唱している自分の姿。別にそういう予定ではなかったのだけれども、結果的にそうってしまったのです。

「それでは、これから、皆さんの担任の先生と一緒に、おうたをうたいましょう。」
その幼稚園の慣例に従って、お人形と共に、担任登場。（この「お人形と共に」というのも、当日いきなり言われてやったので、私の緊張はピークに達していました。）

「皆さん、『ちょうちょう』のおうたを知っていますか？」

「知ってる。」

「うたえる！」等々。

この力強い反応を頼りに、にこやかに私、

「では、一緒にうたいましょう。」

——結果。最初の「ちょうちょう、ちょうちょう、なのはにとまれ」は大合唱。でも、子ども達の「知ってる」「うたえる」は、ここまでだったのです。次のフレーズからは、誰もうたえず、担任の独唱。短いうたなのに、その長く感じられたことといったら！ 次の「げんこつ山のためきさん」で、ようやく、皆楽しめたのでまだ良かった、と自分を慰めつつ、私の「知ってる」「できる」と、子どもの「知ってる」「できる」は、言葉は同じでも、中身は同じではないのだということを実感させられた初日でありました。とはいえ、その日の自分の姿は、あまりにみつともなくて、今思い出すと、笑ってしまいます。笑ってしまうといえは、入園式前日のこと。洗面所で髪をとかすふりをしながら、一生懸命笑顔をつくっていた時。「はじめまして。……と申します。これから……」などと台詞まで練習したりして。偶然通りがかった父の、見てはいけないものを見てしまったという様な困り果てた表情と、自分自身の気まずさはやはり、今でも笑ってしまいます。さて、話はおどりますが、とにかくいつも思うこと。言葉が違ふ、通じない！！

例えば——

「帰る前に、お手洗ていせんいに行行ってらっしゃい。」

「はい。」

もちろん、実際に用を足している子どももいるのだけれど、十人くらいは、ただ手を洗って出てくるのは何故？

「先生、おてて洗ってきたよ。」

——私個人としては、「おしっこ」はあまりに露骨だし、「トイレ」というのも語調がきつい気がするし、かといって、外来語の「トイレ」に「お」をつけるのも……と、ない頭で考えた末に「お手洗い」と言ったのですが、「手を洗ってうがいをする」という習慣で混同する子どもがあまりに多いので、結局のところ、「おトイレ」「おしっこ」と言うようになってしまいました。実際、じぶんの指導案（頭で考えたこと）ほど、あてにならないものはないのでは……と思うこともあります。

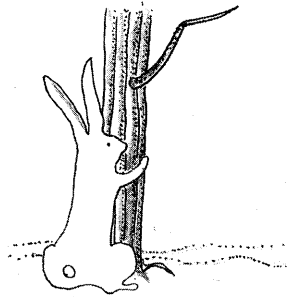
自分にとっての「あたり前」が、相手には「あたり前」ではないという事実を、まざまざと見せつけられる日々。毎日毎日、失敗の連続で、落ち込むことばかりですが、考えたわりには不様な自分の姿とか、本当は笑い事ではないけれど、でも、思い出すと笑ってしまふ様な子どもとのエピソードを見つけられるうちは、教師になるべく、教師を演やっているかと思っています。いつか教師になる日まで。

とある幼稚園で一年、また別の幼稚園で一年、保育にあたって思うこと——を少し、つらつらと書いてみました。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

ハンカチ

松井 とし



「ルンルン、どうしてそんなに上を向いているの？」

学期末の慌ただしい日々をすこし、修了生を送り出してホッとした休日の午後、初めてうさぎの異変に気がついた。笑いながら近づいた私は、事の重大さに驚いた。苦しそうに上を向いて息をしている。

いつかは何かが起こる事を覚悟しつつ過ごしたこの半年余。夏休み前からおしっこに血が混じるようになり、秋に撮ったレントゲンは、彼女の体の中にできている「何か」を映し出していたのだった。わたしたちがルンルンにしてやれる事は、朝夕の薬と日々の散歩を欠かさず、日曜日もお正月も、彼女にとってより良き日をプレゼントすることだった。三学期になって血尿は出なくなり喜んだ。元気はあるし食欲も変わらず。わたしたちの

ティータイムには、前足をひざの上にのせ、バスケットをねだった。それなのに背骨が尾根のように目立ち始め、どんどんやせていった。

かかりつけのお医者さまは「もはや救命はできないが、できる限りの事をしよう」と言って下さり、三日間注射に通った。顔を上にして抱いてやると少しは呼吸がしやすいのか、しきりに抱かれたがった。私の腕の中で、いつもと変わらぬ気高さを失わずにいるルンリンだったが歯ぎしりをしている。苦しいのだろう。翌朝はいろいろな好物を差し出し、悲しそうに首を横に振るだけ。もう何も食えなくなっていた。

診察台の上のルンリンを、しゃがみこんだままじっと見つめていた先生は、「もう楽にしてやろう。この子のためだよ」と静かに言われた。涙をふきながら、でも私は即座にうなずいていた。ルンリンが後足で立ち上がり抱きついてきた。

どの位の時がすぎただろうか。彼女が最後の眠りにつく迄の間、ただただぬれたハンカチを握りしめていた。安らかになったルンリンをつれて帰ると、朝からの冷たい雨が、ひと時雪に変わった。三月末の淡雪。それは、私たちの心に多くのものを残し、かの国に帰っていったルンリンのお別れのメッセージ。

(神奈川県立教育センター)

*** ある日の育児日記から ***
 **** (3) **** 佐藤 和代 ***

娘の圭が八か月の時、私は仕事を再開しました。以来、圭は保育園っ子です。

働く母親に共通の悩みは、忙しい時に限って子どもが病気になること。母親の気持ちから自分の方を向いていないのを、敏感に感じとるからなのでしょう。先日、保育園から職場に電話があり、「圭ちゃん、熱があります」と言われた時も、ああ、ここ三、四日忙しかったから…と納得して、あまり心配もしなかったのです。早退↓保育園↓小児科と、お決まりコースを巡って、翌日にはもう平熱。やっばりね。

ところが、今度は私の親知らずがはれて、痛み出しました。呼応したように、圭は夜になるとまたぐずり始めます。



圭は1歳8か月。
 耳鼻科かキライで
 (おめいまい?) 大を!

とにかく平熱なのだし、私も歯医者へ行きたいし、仕事もたまっているしで、まだ機嫌の悪い圭を保育園に行かせて二日目。また職場に電話が。「圭ちゃん、耳だれが出ています」——

今度は飛びあがりそうになりました。中耳炎?! さぞ耳が痛かったでしょうに、機嫌が悪いのは

精神的なものだとタカをくくっていて、気がつかなかったなんて…。ごめんね、ごめんね、とつぶやきながら、保育園まで全速力!



ヨーロッパ絵画にみる幼児発見の系譜とその背景 (4)

ルネッサンスからロマン主義まで

藤田 博子

Ⅲ. 北方ルネッサンスとマニエリスム

3. ドイツ・ルネッサンスからロマン主義まで

ドイツ・ルネッサンスは、美術的なものより、宗教的色彩が濃く、宗教と社会に鋭い批判を加え、宗教改革と密接な関係を持ちつつ展開している。このドイツ・ルネッサンス（厳密にはマニエリスム）を代表する画家に、デューラー（Albrecht Dürer, 1471-1528）とクラナッハ（Lucas Cranach, 1472-1553）がいる。写真—39のデューラーの『まひわの聖母』の、祈禱書をしっか

りと閉じ、しどけないほどくつろいだ様子の聖母が膝に抱いているおきな子は、生き生きとした生命の躍動を漲らせ、弾むようである。写真—40クラナッハも聖書を主題に、あるいは聖書を離れて、健やかな幼児を数多く描いている。彼は、ルター（Martin Luther, 1483-1546）の友人であり、宗教改革運動の支持者としても有名である。さらにこの時代、エラスムスの肖像画を描いたことでも有名なホルバイン（Hans Holbein, 1497-1543）は、一五二八年に素晴らしい写真をもって、自分の妻と

子どもたちの肖像画を描いている。複雑な精神の塊悩を漂わせる婦人の膝に、簡素なベビー服を着けた幼児と、利発そうな一人の少年が描かれている。これ以降、絵画のなかに現実の子どもたちが生き生きと個性を付与されて登場してくるのである。しかし、ドイツにおいて特徴的なことは、十六世紀なかばルターによってなされた宗



▲39 デューラー『まひわの聖母』

教改革の精神は、カトリック的救済思想を根底から覆して、合理主義を徹底したため、時の流れとともに、人々は、プリミティブな原始宗教、自然のなかに神を見る非合理的な汎神論的信仰に憧れはじめた。また、デュラー以来、ドイツの芸術で優位を占めていたイタリア・ギリシアへの憧憬は、減びゆくものや、自然的精神を愛

するロマン主義の基礎を固めていくのである。この精神性をさらに求め続けたのが、ルンゲ (Philipp Otto Runge, 1777-1810) であった。これらの画家たちは、人間自然にも深い精神的価値を付与したのであった。ルンゲは『小さい朝』のなかで、中央に女性を描き、その下にあたかも大地から誕生したかのようにみどり児を描



▲40 クラナッハ

いている。みどり児は宇宙の朝を告げる初子^{はつこ}とでも言いたそうである。彼はこの他に一連の絵のなかに身近な幼児を温かなまなざしで描いている。ドイツ・ロマン主義において最も深遠な思想を持つ詩人、ノヴァーリス (Friedrich von Hardenberg Novalis, 1772-1801) は『断章』のなかで、ロマン主義的世界観を魔術的観念論

けている。図141の絵は、何気ないありふれた牧歌的な家庭生活に神秘的な夢を添え、母性に崇高な意味を付与し、子どもに神の栄光を与えている。この著の一九二七年版の編者、プリューファ（Johannes Prüfer,）は、その跋文において、「人間の中に無意識なものを発見したのは、ロマン主義思考の功績の一つである。フ

レーベルは『母の歌と愛撫の歌』において母性的本能に芸術性を見出させようとしたのである。」と語っている。母性本能が芸術性ならば、幼児は最上の芸術品に価しよう。

写真142はドイツ・ロマン主義を代表する画家シャドウ（W. von Schadow, 1788-1862）『画家の子どもた



▲42 シャドウ『画家の子どもたち』

ち『一八三〇年の作品である。清らかな輝きを湛えた、この絵のなかの少女ゾフィは、長じてミケランジェロのソネットとダンテの『神曲』の翻訳家としてその名を残している。ドイツ・ロマン主義最大の教育者フレーベルが、主著『人間の教育』を著したのは、この絵の描かれた四年前の一八二六年であり、彼がその著の哲学的命題を体系づけた『*恩物*』を考案し、「さあ！われわれの子どもらのために生きよう。」と高らかに謳って、ロマン主義の最も自由で大胆な表現である『幼稚園 *Kinder-garten*』を創設したのは、この絵が描かれた一八三〇年代のことであった。フレーベルが命名した *Kinder-garten* という名前そのものに、幼児発見の哲学的命題

がひそめられているといえよう。因みに、フレーベルが創設し、命名した『幼稚園』は、その二十七年後の一八七六年に、早くも東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）に付設されたのであった。

以上のように、ヨーロッパ絵画にみる幼児発見は、十三世紀、フィレンツェに花開いたイタリア・ルネッサンスの輝かしい人間再発見にその源を持っているといえよう。そして、その精神はアルプスを越え、北方ルネッサンスに火を点し、フランス・ルネッサンスで熾烈に燃え、ドイツ・ロマン主義の疾風怒濤のなかで、より確かな幼児発見を成し遂げたといえよう。

〈参考文献〉

1. 筧田知義・岡田渥美編『教育学群像』アカデミア出版 一九九〇
2. 会田雄次著『ルネッサンスの美術と社会』創元社 一九五七
3. 上智大学思想研究所編『ルネッサンスの教育思想（上）』東洋館出版社 一九八五
4. 長井和雄編『ロマン主義教育再興』東洋館出版社 一九八五

5. Jean = Jacques Rousseau : ÉMILE OU DE L'ÉDUCATION 『エミール』樋口
勤一訳 白水社
6. Fredelick B. Artz : FROM RENAISSANCE to ROMANTICISM 『ルネッサン
スからロマン主義へ』望月雄二訳 音楽之友社 一九八三
7. Herbert von Einem : DEUTSCHE MALEREI DES KLASSIZISMUS UND
DER ROMANTIK, 一七六〇『ドイツ近代絵画史』古典からロマン主義へ』神林
恒道・武藤三千夫共訳 岩崎美術社 一九八五
8. 高階秀爾著『フィレンツェ』中公新書 一九六六
9. 樺山耕一著『ルネッサンスの人と文化』NHK市民大学 一九八九

—— 完 ——

(浪速短期大学)

三月——今年度もこれでひと区切り、忙しさの中にも、何かほっとする月です。十二月の気ぜわしさと違い、保育室のかたづけをしていても、いろいろな思いが頭をめぐります。あの時こんな事があつた、あの子があんなことを言つた、もっとこうすれば良かった……。保育者の感傷をよそに、子ども達はほこらしげに、慣れ親んだ環境をあとにして、新しい生活へはばたこうとしています。その子ども達の充実感がうれしくて、三月は涙があふれます。

久々に、牛島義友先生より巻頭言をいただきました。教育の理想と現実の教育行政のずれの間で、幼稚園や学校をどう選択するか、又、選択の自由はあるのか親としても、とても関心のあることです。

今月は八風Vをテーマに、いろいろなお立場から書いていただきました。

そよ風、春風、初夏の風、台風、木枯し、空っ風……それぞれ特徴があり、季

節を感じさせます。又、風は実際に吹く風だけでなく、いろいろなたとえにも使われます。心の中を風が吹きぬける、風向きが変わる、風当たりが強い、風通しが良い、無風状態、等々。

風は全てを吹きとばし、新しい空気を運んできてくれます。そして又、どこかへ通りぬけて行つてしまいます。

「子どもは風の子」といわれますが、冷たい北風の中でも元気に遊びまわる子どものイメージに加え、何か新しいものを運んできてくれる、又、新しいことに向かつていく、そんな「風の子」も感じられます。

それにしても、上原那奈世先生の行動力には感心しました。五十歳にして、バイクで北海道の原野を走りぬける……、何とカッコイイ!!「大人も風の子」になれるんですね。私も風に向かって丸い背中をしゃんとのばして……。とりあえず、カゼをひかないように、からでしうか。

(K)

幼児の教育

第九十巻 第三号

(一九九一年三月号)

定価四一〇円(本体三九八円)

平成三年三月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一

発売所 株式会社フレイベル館

東京都千代田区神田小川町三一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話 〇三三三九二七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレイベル館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

フレーベル館 特別企画

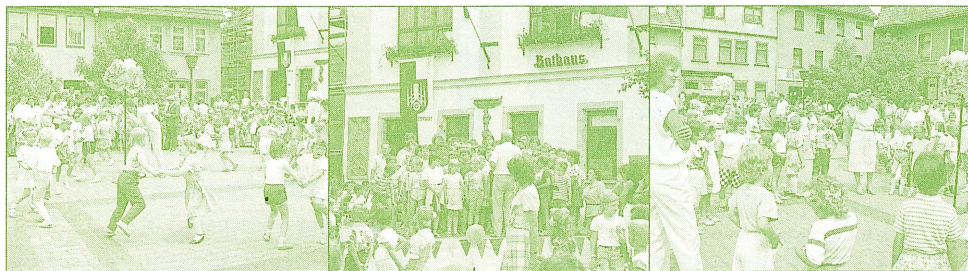
フレーベル先生の遺跡と教育施設をたずねる

ヨーロッパ幼児教育視察

1991年 7月24日(水)～8月3日(土) 11日間

ドイツ・チューリンゲン地方・フランクフルト・ベルリン・ブダペスト・パリ

昨年のツアーより



フレーベル幼稚園創設150年を祝う子どもたち

●ごあいさつ

フレーベル先生の遺跡を訪ね、幼児教育のルーツをたどりヨーロッパの幼児教育施設を視察する、「フレーベル・ツアー」も今年で第12回を迎えます。昨年ご参加の先生方から、たいへんご好評をいただきましたが、今回は特にドイツ統一後初めてのツアーになります。この機会にヨーロッパの自然と文化に触れ、ヨーロッパの幼児教育の現状をご覧になってはいかがでしょうか。



フレーベル先生生誕の家の前で(昨年のツアーより)

●お問い合わせ先

フレーベル館 ヨーロッパ幼児教育視察係
東京都千代田区神田小川町3-1
〒101 電話 03 (3292) 7781(代)

主な訪問地



旅行期間 1991年 7月24日(水)～8月3日(土) 11日間

旅行代金 818,000円 全食事付き (ローンによるお支払も可能です。)

募集人員 25名 (定員になり次第締切らせていただきます。)

申込締切日 1991年 5月31日(金)

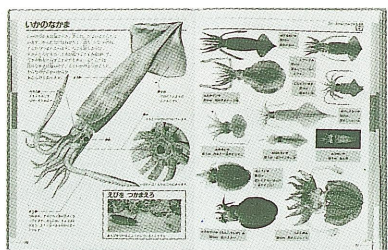
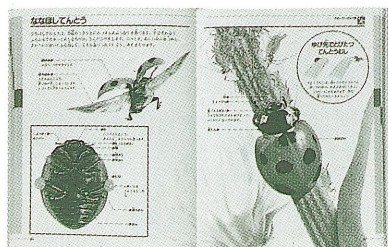
企画：キンダーブックの **フレーベル館**

旅行・主催：日本交通公社

運輸大臣登録
一般旅行業第64号

JTB団体旅行新宿支店 ヨーロッパ幼児教育視察係
(運輸大臣登録一般旅行業第64号)

東京都新宿区西新宿1-18-8 スカイビル4階
〒160 電話 03(3346)0181(月～金09:30～17:30)



- なぜだろう、どうしてだろうといった疑問に答える記事もとりあげてあります。豊富な写真とイラストを組み合わせて構成してあります。
- スーパーリアルズムのワイドな画面によって動植物への関心を高め、そのふしぎさに気づいていきます。
- 基本的な図鑑としての役割を十分に果たしながら、子どもたちの探究心や科学する心を育てます。

幼児の探究心を
育てる図鑑、
小学校の
「生活科」にも
役立つ。

ふしぎがわかる

しぜん図鑑

●第1巻

こんちゅう

●第2巻

どうぶつ

●第3巻

しょくぶつ

●第4巻

みずのいきもの

監
修

東京大学名誉教授 水野丈夫

こんちゅう 前東京都摩動物公園園長 矢島 稔

どうぶつ 東京都摩動物公園園長 増井光子

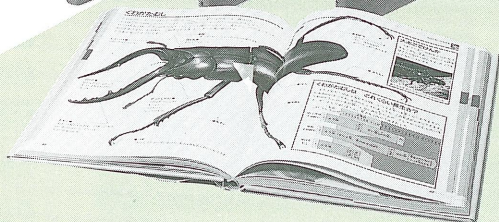
しょくぶつ 園芸研究家 浅山英一

みずのいきもの 国立科学博物館 武田正倫

A4判・上製本・本文116頁

全4巻・定価6,800円(税込み)

各巻定価1,700円(税込み)



くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館